

鈴木淑夫
著

いつまでも続く

日本経済の
躍進



鈴木淑夫
著

いづまで続く
日本経済の
躍進

著者紹介

昭和6年10月 東京都生まれ
30年3月 東京大学経済学部卒業
30年4月 日本銀行入行
51年3月 経済学博士（東京大学）
59年3月 日本銀行金融研究所所長
63年5月 同行理事
平成元年7月 野村総合研究所副理事長

主な著書に『金融政策の効果—銀行行動の理論と計測—』、『現代日本金融論』、『金融自由化と金融政策』、『世界の中の日本経済と金融』、『日本経済 日はまだ高い』、『Money, Finance, and Macroeconomic Performance in Japan』、『Japan's Economic Performance and International Role』など。

いつまで続く 日本経済の躍進

1991年6月21日 初刷

定価はカバーに
表示してあります

著者——^{すずきよしお}鈴木淑夫

発行者——宇都宮健一郎

発行所——N T T出版株式会社

〒105 東京都港区芝公園2-9-5 向陽ビル

T E L (03) 3435-1212

F A X (03) 3435-1155

印刷——図書印刷株式会社

© Suzuki Yoshio 1991 Printed in Japan (検印省略)

乱丁・落丁はおとりかえいたします。

ISBN4-87188-122-9 C0033

はしき

日本では、将来についてたくさんの問題点を指摘し、悲観的な見通しを述べなければ、インテリではないと思われる傾向がある。いわゆる警世家であることが期待されているのだ。エコノミストについても例外ではない。この数年間、繰り返し繰り返し、好況は終わるとか、日本経済の発展はおしまいだとかいわれてきた。その予言が外れても外れても、悲観的エコノミストの活躍は続いている。イギリスにもその傾向があり、シニカルなのがインテリの資格のように思われている。日本経済「落日論」を書いたビル・エモット氏も、その一人である。

しかしアメリカでは、むしろかしい状況のなかで、発展への道筋を見分けるのが、インテリの仕事だと思われる。今日の合衆国を築き上げたバイオニア精神が、生き続けているからかもしれない。ノーベル賞受賞者が多いのも、これと関係があるのだろうか。

ダメだダメだといっていれば、いつかは当たる。とくに市場経済は自己実現的なところがあるので、企業家や消費者が、それを信用して投資や消費を控えると、本当にそうになってしまう。し

かし私は、現在の好況はまだ続く条件を持っているし、日本経済の中期的發展も、政策的対応を間違えなければ、九〇年代中は続くと考えている。そのような日本経済躍進の道筋を説き、それに向かってみなで努力するように呼びかけたいと思って書いたのが、この本である。

まず第一部では、プラザ合意以降五年間の日本経済の躍進と、トリプル安や湾岸戦争に翻弄された最近一年間の日本経済の動揺を対比し、どこに明日の日本経済を解く鍵があるのかを考えてみた。第二部では、日本経済は間もなく落日の運命にあるとするイギリス人ジャーナリスト、ビル・エモット氏の議論を正面から吟味した。そのあと第三部では、何をしないと本当に落日の運命を迎えるのか、どのような社会を築かなければ生き残れないのか、を考えてみた。最後に第四部では、新しい世界秩序の再構築に向って、経済大国日本の果たすべき役割を論じた。

この本は、新しく書き下ろしたものである。といっても、さまざまな機会に話したり、書いたりした内容が含まれているので、内容的にはそれらとの重複があるだろう。しかしわかりやすい組立てでわかりやすい表現を用い、また一般の読者が読みやすいように、必要な数字は文中に入れ、表やグラフはほとんど使っていない。

この本を読んで、日本国民のみなさんが、どこに日本経済躍進の原動力があり、どこに弱点があるかを、国際的視野を含めて理解して下さるならば、これに過ぎる幸せはない。

最後にこの本は、NTT出版取締役出版部長の赤木邦夫氏の協力なしには、出来上がらなかったろう。氏は三年以上も前から私に対して、日本経済論をまとめるように熱心に勧めてくれた。当時は日本銀行理事で発言は制約されていたし、その後民間に移ってからは、なかなか落ち着かなかったもので、つい延び延びになっていたが、ようやく約束を果たすことができた。お世話になったNTT出版の松村伊知郎氏とあわせ、お二人に厚くお礼申し上げたい。

一九九一年五月

上高井戸の書齋にて

鈴木淑夫

目次／いつまで続く日本経済の躍進

はしがき

第一部 日本経済の発展は本物か

1 節 波乱万丈の一年間と躍進の五年間——どちらが本当か

4

トリプル安から湾岸戦争まで／プラザ合意以降の大躍進

2 節 質的飛躍は一時的現象か

9

アメリカ経済失敗の裏側／異常な超低金利の結果／日本は政治的に孤立しないか

3 節 質的向上は本物である

14

經常収支の黒字縮小は止まる／中期的には円高が再開する／4%成長でも先進国中の最高／バブルとはなにか／株価には一時的バブルしかない／日本の株価収益率（PER）が高いのは自然／地価にはバブルがある／超低金利時代とは／超低金利時代の落とし子／バブルを考慮しても日本は資産大国／ポスト湾岸の影響は心配ない

4 節 日本経済発展の秘密

44

技術革新投資の高い伸び／高い貯蓄率は変わらず／強い均衡回復力／行
革・財政再建路線／物価安定を最優先

第二部 日本経済「落日論」を吟味する

1 節 ビル・エモットの日本経済「落日論」 62

資産大国は砂上の楼閣か／経常収支黒字はまもなく消える

2 節 正しい指摘、誤った認識 69

国内貯蓄は急減しない／株価と地価は脆くない／このままでは二十一世紀
初めに日没する

3 節 九〇年代が「落日」の予言を覆すラストチャンス 82

社会システムの転換に一〇年かかる／世界に貢献する内需主導型の定着
が急務／高齢型税制への転換も時間をかけて／日本政府も少しずつやって
きたが

4 節 経済展望の楽観論と悲観論 93

日本人とイギリス人の悲観論好き／ショックがなければ景気は続く／現在

第三部 魅力ある日本社会のデザイン

1 節

日本社会はなぜ高齢化する

104

日本人は世界一の長生き／女性が子供を生まない

2 節

「魅力ある社会」とは

108

だれでも夢を追える社会／「三過ぎ」はダメ

3 節

女性と高齢者にチャンスを、父親に余暇を

111

働き過ぎと暇過ぎを直す／現実的な老齢年金制度へ／勉強し過ぎを直す

4 節

外国人未熟練労働者は単身赴任の研修制度で

119

人的交流を促進しよう／未熟練労働者の無差別受入は援助にならない／日

本の需給緩和策にもならない

5 節

生涯健康、生涯青春、生涯幸せ

123

余暇をエンジョイしよう／「寝たきりゼロ」を目指して／だれでも努力す

れば買える地価へ

6 節 新しい社会システムを創るには 134

情報通信技術で新しい社会が創れる／縦割り行政の打破が前提

第四部 世界秩序の再構築に貢献する日本

1 節 九〇年代は歴史的な大調整期 142

2 節 アメリカは独りで秩序を守れない 146

秩序を支えてきた覇権体制／バックス・アメリカカーナは崩れ始めた／あやしくなった自由貿易の旗手／他人のカネを当てにする軍事行動と社会の荒廃

3 節 ヨーロッパの再浮上とアジアの初登板 158

4 節 ヨーロッパがよみがえる／東アジアが世界の檣舞台へ／世界は三極構造へ
追い上げる南、戸惑う北 167

東西問題の重荷がとれ、南北問題が吹き出した／保護主義と民族主義が対立する危険

5 節 日本が自由貿易をリードするとき 172

日本の市場開放が自由貿易を救う／農業は保護、工業は自由貿易では通らない

6 節

湾岸戦争は日本になにを教えたか

179

アメリカの覇権体制復活は不可能／湾岸戦争の三原則は戦後に持ち越せない／愚かなサダム・フセイン／複雑な湾岸の事情／日本の湾岸貢献／積極的な平和主義への転換

7 節

新しい三極構造を支える日本

197

西太平洋経済圏の形成に貢献しよう／高まる円の国際的役割／円を国際通貨にしよう／西太平洋地域安定のアンカーになろう

第一部

日本經濟の發展は本物か

要 約

最近の日本経済は二つの顔を持っている。一つは「いざなぎ景気」を上回る史上最長の景気に挑戦する顔で、この五年間の躍進ぶりには目を見張らせるものがある。もう一つは、過去一年間、株価の大幅下落、地価に見られるバブルの発生、そして貿易収支の黒字縮小と円レートの円安へのフレなど、経済の先行きに不安を見せている顔である。折りしも、湾岸戦争は短期間で終結したとはいえ、九〇億ドルの抛出金負担や日米摩擦の激化など、その後遺症が心配されている。

この二つの顔のうち、日本経済の本当の顔はどちらなのであろうか。

過去五年の躍進ぶりを「一時的現象」とみる根拠もあるようにみえるが、それは偏った見方であると思う。先進国のなかで抜きん出た五%台の高成長を続けてきた日本経済は、この間、質的にも大いに充実してきた。そのファンダメンタルズは強固で、明年にかけて経常収支の黒字再拡大、円レートの上昇、さらに設備投資の持続が起こり、景気後退に陥ることなく巡航速度の成長軌道を歩むものと予測される。

バブルの破裂についての不安は根強いが、株式については、金利が上昇し、また企業収益の伸び悩みを反映して予想収益率が低下したことに伴う、きわめて合理的な調整で、い

まの水準はもう崩れないとみる。ただ、地価に関しては「土地神話」に基づく投機があつたことは否めず、試算によれば、三―四割は「バブル」とみられる。ここへきて地価が下落し、思惑に走つた不動産関連企業で倒産が増えているが、これは、超低金利時代を清算する調整過程で起る当然の現象であり、いわば、健全な調整といえよう。

とすると、この調整に伴う成長減速のあと、日本經濟は巡航成長の軌道に軟着陸するとみられるが、その力ぎを握るのは設備投資である。今後中期的には、円レートは上昇していくとみられるが、過去がそうであつたように、必ずや技術革新投資が盛り上がつてこようし、その投資をファイナンスする貯蓄も、家計部門の高貯蓄率の持続からみて、不足することはないとみられる。

ただ、こうした日本の市場經濟のもつすぐれた特性をフルに發揮させるには、政策が適切にとられる必要がある。その一つは財政規模や公共部門の拡大を防ぎ、民間市場經濟の領域を広げる努力をすること、もう一つは、国が物価安定を最優先にした自律性のある經濟運営をはかることである。この政策さえ間違わなければ、日本經濟は過去五年間と同じような質的飛躍が、九〇年代を通じて続くであろう。

1 節 波乱万丈の一年間と躍進の五年間——どちらが本当か

トリプル安から湾岸戦争まで

最近の一年間というもの、日本経済はまさに波乱万丈の時を過ごした、といっても過言ではないだろう。

一九九〇年二月に、いわゆるトリプル安が発生し、株価と債券相場と円相場が暴落を演じた。株価はその前年の暮れに、日経平均で三万九〇〇〇円をうかがっていたものが、一時二万八〇〇円まで下落し、また、債券相場の暴落に伴って、国債指標銘柄の市場利回りは、前年末の五・五%から七・二%にまで上昇した。円相場は大きく崩れて、一時一五九円から一六〇円に達しそうな勢いであった。こうしたトリプル安の時期が二月から四月にかけて続いたあと、五月の連休

明けには、ようやく市場も落ち着きを取り戻した。株式相場は三万二〇〇〇円まで回復し、国債の市場利回りも六・三％まで下がってきた（それだけ相場は上昇した）。円相場もこのころから、徐々にではあるが、円高方向へと動き始めたのである。

人びとがようやくホッとして、夏休みを取ったころの八月初め、今度は中東湾岸地区で、イラクのクウェート侵攻が発生した。これに伴い国際原油市況が高騰し、日本には物価上昇とそれに伴うデフレ効果、つまり第一次石油ショックや第二次石油ショックのときと同じような、スタグフレーション（インフレとデフレの同時発生）的なインパクトが加わってきたのである。これに対応して、日本銀行は第五次の公定歩合引き上げを行った。その結果、九月末から一〇月にかけて、再び株式相場も債券相場も大きく崩れた。株価は一時瞬間風速で二万円を割り、国債市場利回りは実に八・五％まで上昇した。

しかし幸いにして、国際原油相場はその後反落に転じた。これはサウジアラビアなど湾岸諸国が増産に努力し、それまでイラクとクウェートから輸出されていた、一日四〇〇万バレルの原油のカット分を補うべく、輸出を始めたからである。

さらに年を越すと一月一七日、湾岸戦争がついに多国籍軍とイラク軍の間で勃発し、再び日本經濟の先行きは大きな不透明感の霧のなかに、すっぱりと入ってしまった。霧に包まれて先が読めない、という状況が続いたのである。しかも日本に対しては、一日当たり五億ドルの戦費の二